

2016年4月23日

宇沢弘文『社会的共通資本』を批判的に読み解く

古川一郎

- 1章の概要：人類の歴史上現在に至るまで、安定かつ持続的に人々を救済するような社会的制度は存在しておらず、そのような制度を構想する基礎となるべき経済理論（社会主義（空想的、科学的）も資本主義も）はない。市民的“自由”、人間の尊厳、職業的倫理を前提条件として、安定的かつ調和的な経済発展する制度的枠組みを考える必要がある。そのような制度は、それぞれの地域の持つ倫理的、社会的、文化的、自然的な諸条件がお互いに交錯して「作り出される」もの。すなわち、下部構造（経済の合理的構造）が上部構造を規定するというマルクスの発想を超えるものでなくてはならない。この新しい制度を構想するとき、社会的共通資本を中心に据えなくてはならない。
- 2章の概要：農村（＝社会的共通資本）に対する憧憬。農業には自然と共生するという特徴があり、人々は主体的に活動することで工業における人間疎外を避けることが出来る。効率性基準を発想の原点に持つ農業基本法は、このような農業を育成するのではなく壊滅する役割を果たした。「共有地の悲劇」⇒共通資本を私有制にすべき、という主張への反論。観察すればコモンズは多くのところで人々に上手に利用され人々の暮らしを豊かにしている。国家ではなくフィデュシアリーによる管理。
- 批判1：道具主義と合理性が経済学の出発点の原点にあり、実践のなかの制度と人間の相互作用を発想することと本質的に相性が良くない。経済学は新しい制度を構想する役には立たない。経済学が出来ることは、暗黙的なコストを明示的に主張し、現行の制度の矛盾を明らかにすることだけで、新しい制度を構想し解決策を示すというようなことは原理的に出来ない。
 - 道具主義：私たちは選択の連続の中で生活しているが、経済学における効用概念はそのような選択する個人がどの代替案を選択するのかを説明するために考え出された概念である。私たちはすべからず集団を作り協同するが、集団的な意思決定においても代替案に優先順位（～すべき）を示すことが重要になり、その意味で経済学の道具主義的な発想は極めて有効である。新古典派（限界革命）は数学的に洗練されており、極めて論理整合性に優れ、合理的なので、理論それ自体に文句をつける人は少ない（例外、アロー、一般可能性定理）。しかしこのような道具主義アプローチは、人々が様々な相互作用を行い、その中から“いまここ”で選択

を行い主体的に実践に関わっているような社会の“制度”を考えると相性が悪い。制度は神様が与えられるようなものではなく、人々の実践の中から生まれ、実践の中で運用され、複雑なプロセスを通してやがて正当性を確立していくものである。経済学は、実践の中から学び成長するという人間の生き物としての本源的な側面を理解する気がない。市民革命が獲得した自由、私有財産制という価値観に立脚。

- 制度と正当性：社会学系の人たちが以前から議論しており、マーケティングの論文（JMなど）でも最近注目されるようになった。経済学者のオリジンではない。人々の行為は、ルールに従っている（ジョセフ・ヒース、『ルールに従う』、ヒースは哲学者）。ルール≒制度の中の論理（institutional logic）≒正当性。正当性には3つのレベルがある。明示的な制度、規範・倫理・道徳・慣行、暗黙的な知識。JMでは、米国におけるヨガやカジノの事例を legitimacy という観点から分析した事例。
- 批判2：資本とは何か？定義がない。人々の役に立つ何かを生み出すものに使われるもの？人、モノ、カネ、情報等々。文化は資本か？文化は制度であり、文化を論考の中心に置かないで制度を論じることはできるのか？
 - 制度主義の下では、生産、流通、消費における希少資源は、私的資本と社会的共通資本に2分される。特に重要な社会的共通資本は、教育と医療。
 - 生産され流通され消費されるもの以外は、“資本”の対象にならないのか？コスト負担なしに人々を気持ちよくさせる資本は、希少資源でないのでここでの考察の対象にならないのか。美しい棚田。原風景。子供が石けりして一人で遊んでいるときの石。デザイナーが紙ナプキンにボォーとしながら遊んで書いているときの紙ナプキンや筆記具。要するに、“金とつながるから資本”、“金とつながらないものは資本でないので本書の対象ではない”というイメージを払しょくできない。カネとつながらない文化は資本ではないのか。資本の定義。宇沢先生は希少資源と組で使っている。経済学者なら、これまでの経済学の考察範囲だった資本概念を拡張することで、こんなに新しい世界が広がるといった議論をしてほしかった。社会的共通資本とは何か？
- 批判3：宇沢先生は理想を掲げたが、“制度”が満たすべき条件に付いて述べているだけで具体性に乏しい。宇沢先生は何一つ具体的な未来のイメージを提示されなかった。現状に不満を述べただけで目指すべきビジ

ジョンがない以上、今の時点で未来に向かってどのようなプロセスを設計できるかを考えることが出来ない。共通の議論の土台をつくる作業から始めなくてはならない。

- ジョン・デューイ（1938）『経験と教育』：伝統的教育に対する批判⇒経験のデザイン
 - 経験の連続性と相互作用：
 - 連続性：快・不快、ある経験がその後の経験にどのような影響を及ぼすかという、経験の2側面がある。快だけど未来の経験につながらない経験。不快だけど未来の豊かな経験につながる経験。未来を見据えた“いまここ”の経験を考えなくてはならない。
 - “教育者の基本的責任は、年少者たちが周囲の条件によって、彼らの現実が形成されるという一般的な原理を知るだけでなく、さらにどのような環境（自然的、社会的、たぶん教材を含む）が成長を導くような経験をするうえで役立つかについて、具体的に認識することである。・・・教育と経験との必然的な結びつきに基づく教育のシステムは、・・・”⇒新しい制度を構想するということ。⇒構成主義にのっとった体験型科学教育（LHS）へと。
 - 相互作用：“経験というものは、経験しつつある個人の内部で進行しているもの（主体性、自分の頭で考えている）に従属させられてこそはじめて真の経験であるといつてよいのである。”ただし、賢明な母親と赤ん坊の事例をイメージすればわかるように、内的条件に従属するといつても、正常な経験は、客観的条件（働きかける人が観察する事実、専門知識、実行可能な手段）と内的条件（受け手）とが相互作用した「状況」において生まれる。自由に対する制限⇒協同的・相互作用的状况における成果の向上を目指す。秩序、ゲームのルール、自由を侵害しない社会的コントロール、教育的配慮が必要。場の構成。
 - “目的”は結果への見通しであり、知性の作用が含まれる：
 - 客観的条件と環境とを観察することが求められる
 - 諸要因の意味付け：実践による理解。“見るもの、聞くもの、触れるものがなんであるか、その意味を理解しなくてはならない。この意味は、見られたものが実践に移された場合に生じる結果から成り立つものである。・・・わ

れわれは以前の経験によってのみ、結果がどうなるかに気づくことができるのである。”経験・実践から学ぶ。

- 目的は計画や方法に転換される。これが衝動や欲望との違いである。
- デューイから何を学ぶか：常盤塾的解釈
 - 経験と文化・制度の関係、たとえば、花王のTCR運動。
 - 制度の確立過程と経験の関係。経験はルール（制度、正当性）に制約されていく。TCR運動の歴史。期を重ねていくたびに目的が深く広く、経験の質も量もよくなっていく。
 - 本質的な問いが重要。デューイにおいても具体的な教育制度の理想的なイメージは語られていない。“いまここ”で何が問われているか、問題に直面しかかわっている人たちが主体的に考え、実践していかななくてはならない。
 - 社会的共通資本としての教育の側面は、デューイは考えていない。
- 社会的共通資本（以下、コモンズ）の分類と、コモンズを維持・管理する制度との関連性についての議論
 - Uber、Airbnb。私有財産のコモンズの側面。
- ICT、IoTといったイノベーションがライフスタイルを含む制度の与える影響とコモンズの未来についての議論。
- コモンズのポリモーフィックな側面を考える必要。
- 新しい時代を支えるマーケティングの理論には、コモンズを組み込まなくてはならない。